いじめの国際比較における概念分析の方法に関する検討

―― 家族的類似の概念構造の形成と扱い方を中心にして ――

姚　　逸　葦

1　問題の所在

「学校におけるいじめ」という現象はヨーロッパをはじめ、アメリカ、アジア諸国において深刻な問題として認識されている。いじめは被害者の精神障害ないし自殺（Gini and Pozzoli 2009; Srabstein and Piazza 2008）をもたらすリスク要因と確認されたため、各国においてその発生を防止する取り組みが実行されている。いじめの未然防止など適切な対策を制定するために、単に自国の経験を参照するだけでは決して十分でなく、ほかの制度的条件のもとで、いじめはどのような特徴を呈するか、どのような方法で有効に抑制できるか、という情報を事前に知れば、より有効な政策が得られる。いじめのみならず、恐らくそれは大多数の比較研究の目的である。自国のいじめ対策を制定し、評価する際に、ほかの国は対照グループとして利用され、その実践から経験または教訓が汲み取られる。

1990 年代以降、いじめ現象の根源的な理解のために国際的な共同研究や比較研究が要請され、実施されてきた（森田 2010）。しかし、研究の展開に従い、同じく「いじめ」と呼ばれるにもかかわらず、それぞれの社会においてはその意味する実態が必ずしも完全に対応しないという問題はしばしば研究者を悩ませる（Smith 2014: 25-7）。通常、比較対象の定義の不一致または不統一という問題が生じたら、研究の妥当性と信頼性を確保するために、国際比較を断念しなければならない。たとえば、A 国では、X がいじめをもたらした要因として認められたが、同様な命題が B 国では確認されなかったとする。もし A 国と B 国の間でいじめ外延の差異があれば、「B 国において X がいじめをもたらさない」と「B 国において X が起こした現象がいじめと見なされない」という 2 つの可能性がある。両方の影響をはっきり区別しなければ、社会科学研究としての信頼性は失われてしまう。

それゆえに、比較研究を可能にするために、研究対象の定義を統一する作業は不可欠である。現在に至るまで、それぞれの社会の独自の定義から、共通の部分を抽出して統一の

操作的定義を作成するのは、社会科学の比較研究の標準的な作法となっている。一部の概念は、その作法を通じて定義の不一致の問題が解消されたが、ただし、いじめの比較研究の場合には、同じ操作的定義を用いても、そのズレは依然として残っている（Smith 2014: 45-7）。現在のいじめの国際比較において、最も強い影響力を与え続けているのは Dan Olweus によるいじめの操作的定義である（Sentenac et al 2011: 461）。しかし、その定義は Olweus の研究対象である北欧の社会的関心を反映したものであり、必ずしも日本、中国、台湾、アメリカにおけるいじめに当てはまらない。そのため、調査対象の使用慣習を無視し、一方的に自らの操作的定義を使用した結果、研究者に配慮されなかった問題がしばしば報告される（Smith 2014: 45-7）。そこでは、いじめの定義操作のジレンマが見られる。各国の独自のいじめ定義を使用すれば、共通基準が得られないため、国際比較は断念せざるを得ない。一方、各国の間でいじめの定義が一致しないという現実を無視し、ある国のいじめ定義を共通の基準としてほかの社会で調査する際に、適用性の問題は解決できない。

なぜいじめの国際比較において、いじめの定義にそのような「ジレンマ」が生じたのか。その要因について、著者は以下 2 点にまとめられると考える。第一に、既に別稿で指摘したように、国際比較研究におけるいじめ概念は、Ludwig Wittgenstein の提示した「家族的類似」の構造を呈している。「家族的類似」の概念において、成員は必ずしもある「共通の属性」を持っているわけではなく、むしろ家族の成員たちの体型、顔つき、眼の色、歩き方、気質などの類似性と同じように、ほかの成員のただ一部の特徴だけを持ち、重なりあい交差しあっているという形式で類似している（Wittgenstein 2003=2013: 61-3）。そのような概念構造から共通の属性を抽出し、統一的な操作的定義を作るのは論理的に不可能である（姚 2015）。各国のいじめ概念は家族成員の特徴の類似と同じように、共通項が見えない。従来の概念分析の方法に従えば、いじめの国際比較は断念せざるをえない。しかし、「いじめ」は現代世界の学校空間において生徒たちを巻き込む現象として、多くの社会で発見され、深刻な社会問題と認識されている。その共通の問題を共同で検討し、その現象を解明することが研究者に強く要請されている。しかし、ある部分は共通だがほかの部分はまったく異なるというように、いじめ現象の特性を要素にわけ、各社会の共通項を探るという作業はきわめて困難であり、行き詰まったのである。その袋小路から脱出するために、従来の「共通項を探る」という概念観を放棄し、「家族的類似」の考え方を採用しなければならない。

第二に、「いじめ」は具体的な行為および行為の発生する文脈を指示する概念となり、その抽象度がかなり低い。いじめ研究、とりわけいじめのパイロット調査を実施する際に、回答者はしばしば研究者の事前に規定したいじめの操作的定義に従わず、自分の持ってい

るいじめ概念に関する理解によって回答する。以上の2点の要因は、前者が概念構造の多くの可能性への配慮を求め、後者が概念形成の多様なルートへの配慮を要請する。

本稿は、いじめのような複雑な構造を呈した概念が比較研究で扱われることを可能にする基礎的な作業となる。すなわち、いじめの国際比較が直面した以上のジレンマ状態を乗り越えるために、大規模な国際調査への途上でいったん足を止めて、そのジレンマが生じた根源にさかのぼる。その第一歩となるのは、概念の深層にたどり着き、いじめの「家族的類似」という概念構造をもたらした論理を解明することである。そのうえで、いじめ概念を社会科学の比較研究に応用する際の方法論を検討する。最後に、概念構造に関する理論と既存の概念分析の方法に基づき、いじめの概念構造に適した分析方法である「要素間の関係シンボル」という分析道具を提示する。

2　概念構造に関する3つの学説

人間に認知され、使用されている「概念」とその構造は、古代ギリシア時代から現代まで哲学、言語学、心理学の研究の対象となっている。概念と概念構造に関する理論は、主に3つの学説に分けることができる。そして、3つの学説は時系列に並べられ、新しい学説は前の学説の問題点を批判した上で提示された解決策と見なされる。以下では、3つの学説の主張を順に考察する。

2-1　形式論理学とその問題点

形式論理学の概念理論は社会科学の比較研究の領域において最も強い影響力を持っている。日本の文部科学省によるいじめの公式定義にせよ、前節で考察したOlweusによるいじめの定義にせよ、ほとんど全てのいじめ概念の操作的定義は、形式論理学の概念理論に従って作成されている。本稿は、形式論理学の概念理論の弱点を批判するものの、いじめの国際比較において呈したジレンマの状況を理解するために、形式論理学の概念理論に対する考察は必要である。

長い歴史を持っている形式論理学において、概念に関する議論は古代ギリシアの時代までさかのぼることができる。アリストテレスは『カテゴリー論』において、事象と定義の一対一の対応を主張した。彼によれば、「『同名異義的』と呼ばれるのは、名称だけが共通であり、その名称に対応した、事象の本質を示す説明規定は互いに異なるものである。……他方で、『同名同義的』と呼ばれるのは、その名称が共通であるとともに、その名称に対応した、事象の本質を示す説明規定も同一であるものである」（アリストテレス 2013:

12)。つまり、同じ名称を持っている2つのものは、それぞれの本質を反映する定義によって区別することができる。2つの対象が同じ種に属するか否かということは、人々の判断に依存せず、既に2つの対象それぞれの本質によって決定されていた。

哲学者 Thomas Hobbes は概念と実在物の対応関係についてより詳細に説明した。Hobbes によれば、「無数のものが一つの総称を帯びるのは、何らかの本質的な性質または付随的な性質に類似性があるからだ。したがって、固有の名称を聞くと一つのものだけが思い浮かぶのに対して、総称を聞けば、無数に存在する同類のうちいずれもが想起される」(Hobbes 1651=2014: 58)。そして、想起のプロセスでは、定義も不可欠である。Hobbes によると、「言葉の第一の効用は名称を正しく定義することにあると言える」。そして、「真理とは、何事かを判定する際に名称を正しく並べることにある……正確な真理を追究しようとするなら、自分の使うそれぞれの名称が何を表しているのか、記憶しておく必要がある」(Hobbes 1651=2014: 52-3)。つまり、2つの対象が同様の構成要素を持っていれば、その間の共通性が確認できる。

形式論理学はある対象の定義をその対象の本質に対する記述と見なす。形式論理学の概念理論は対象の定義と対象の性質の間にある対応関係に基づき、定義の共通要素によって対象の類似性を判断する。つまり、異なる社会において使用されているにもかかわらず、2つのものが共通の属性を持つと、同じ概念の成員として認められる可能性がある。定義に基づいて判断する場合には、定義が共通の構成要素を持てば、その間の共通性が確認されるようになる。

しかし、現実世界において、以上の概念理論は必ずしもすべての事物に当てはまらず、しばしば反例が見られる。まず、数学や物理学の用語を除き、日常生活で使用されている概念は常に明確な定義を持たず、意味があいまいかつ多義的、とりわけ Wittgenstein の提示した「家族的類似」の概念構造の現れた場合が多い。また、形式論理学の「排中律」によれば、「2つの矛盾する判断は、同時にそして同じ関係において、一方は真であり、他方は偽でなければならず、第三者、中間者は存在することができない」(仲本 2001: 48)。形式論理学にとって、家族的類似の構造は「事象と定義の一対一の対応関係」および上述の「排中律」に当たらず、形式論理学の概念理論を適用できない。そのため、「家族的類似」というより複雑な構造に適用できる概念理論が要請されている。

2-2　Rosch：「プロトタイプの効果」と要素クラスター

形式論理学の以上の弱点を克服するために、Eleanor Rosch は概念認知の「プロトタイプ理論」(prototype theory) を提唱した。形式論理学と比べ、プロトタイプ理論の主張は

日常生活において人間の概念認知プロセスと近似し、意味のあいまいな概念、あるいは家族的類似の構造を呈した概念を扱うとき、適用性の優勢を示している。特に、いじめの概念を理解する際に、プロトタイプ理論は形式論理学に取って代わりうる理論と言える。

プロトタイプ理論によれば、概念の構成要素は必ずしもすべての概念メンバーにおいて出現するわけではないが、その出現は恣意的ではなく、むしろ一定の規則に従っている。Rosch は 2 種類の概念成員を区分した。ある概念において中心的な位置を占めるのは、その概念を表徴する最良例、すなわち「プロトタイプメンバー」（prototype member）である。概念は常に一つのプロトタイプメンバー、および複数の「非プロトタイプメンバー」（non-prototype members）によって構成される（Rosch 1973）。そして、ある成員は「プロトタイプメンバー」または「非プロトタイプメンバー」になる要因を理解するために、Rosch は「要素のクラスター」という概念を提示した（Rosch et al. 1976）。「要素のクラスター」によれば、ある要素は同様な確率で全ての概念の中で出現するのではなく、むしろクラスターの形で、すなわち一部の要素（クラスターの成員である要素）と共に現れる頻度が高く、それ以外の要素（クラスターの成員ではない要素）と共に出現する頻度が低い。出現する頻度の高い要素がクラスターの「中心的要素」となり、頻度の低い要素が「周辺的要素」となる。あるクラスターの要素のすべてを持つ必要はなく、中心的要素を多く持っていると、ある対象は概念の成員と認められる。2 つのものがそれぞれ概念 Y の要素クラスターの要素を持っていれば、両者が同じく Y 概念のメンバーとして認知されるのも可能であり、共通の要素を持つ必要はない。非プロトタイプメンバーはそれぞれ一部の周辺的要素だけを持つ場合に、概念は家族的類似の構造を示す可能性がある。

George Lakoff がプロトタイプ理論の成果を踏まえて提示した概念の「放射状カテゴリー」構造（Lakoff 1987=1993）は、プロトタイプ理論の典型例である。「放射状」の概念構造の特徴を説明する際に、彼は「母親」という概念を例として挙げた。具体的には、人々に普遍的に共有される「母親」の概念とは、子どもを生んだ女性であり、子どもの遺伝子のうち半分を与え、子どもを養育し、父親と結婚していて、子どもの法律上の保護者である。ただし、「継母」、「養母」、「代理母」、「未婚の母」、「生物学上の母」、「遺伝上の母」といったような、普遍的に共有される「母親」の概念の一部の特徴だけを持っている概念も、必ずしも「母親」ではないとは言えず、「母親」の下位概念と認められることもある。Lakoff は以上のような概念構造を「放射状カテゴリー」（radial category）構造と名付けた。つまり、「継母」、「養母」、「生物学上の母」、「遺伝上の母」などの下位概念は、「母親」という中心的なモデルから拡張され、放射して生成されたものである。それらの下位概念も、中心的なモデルの一部の特徴を共有しており、家族的類似の構造を示す。

概念構造の形成において重要な役割を果たした「要素のクラスター」はどのように形成されたのか。Roschの解答は以下の通りである。現実世界では「自然なカテゴリー」(natural categories）が存在する（Rosch et al. 1976)。概念と対応する要素のクラスターも、自然的に形成されたものである。すなわち、「現実世界にあるそれぞれの特徴は互いに独立して出現しないため、世界もそれに対応する構造を持っている。たとえば、羽を持つ生物は、毛皮を持つ生物より翼を持っている可能性が高い。椅子の外観を持つものは、ネコの外観を持つものより『座れる機能』を持っている可能性が高い」(Rosch et al. 1976: 383)。また、事物と概念の認知の関係について、Roschは行動主義の「刺激―反応」の図式を採用した。彼女によると、「世界は無限の異なる刺激によって構成されている。異なる刺激を同質なものとして扱うことにより、世界を様々なカテゴリーに分類するのは、生物の最も基本的な機能である」(Rosch et al. 1976: 382)。すなわち、関連性のある刺激を与えた事物を同一の概念として認知するのは、人間の本能である。形式論理学の主張した「事物と定義の対応関係」は、Roschに「事物＝刺激と概念＝反応の対応関係」と位置づけられた。

しかし、自然世界の概念、たとえば色や時間の命名は文化、社会によって異なっている。プロトタイプ理論では、認知モデルの形成の受けた文化的、社会的影響を明確に説明しなかった。つまり、現実世界において、属性による刺激と人間の反応の関係は、単に属性の関連と構造によって決定されたのではなく、非自然的な側面による影響も受けている。Gregory L. Murphyによれば、人間は概念を認知し、学習する際に、決して簡単な観察や対象の属性のみに依拠するわけではない（Murphy 2004: 63)。つまり、Roschのプロトタイプ理論において、概念は形式論理学の主張した現実世界の事物の忠実な模写ではないものの、依然として受動的な存在である。

2-3　Murphy：「知識の効果」と知識

Roschのプロトタイプ理論において、要素のクラスターに含まれる要素を決める基準、および概念が形成する際に受けた社会的、文化的影響などの課題は未解決の状態になっている。また、概念のメンバーが互いに繋がり合って一つの総体としてまとまったメカニズム、すなわち概念の一貫性（conceptual coherence）に関する説明も不十分である。Murphyは構成要素の相関性、構成要素の選択、要素間の繋がり方などの側面からプロトタイプ理論を批判しながら、解決策を提示した（Murphy and Medin 1985)。

前述したように、Roschのプロトタイプ理論では、概念の成員性がその概念の構成要素の相関性に還元された。しかし、Murphyによれば、現実世界における要素の構造を簡単に概念の構造として理解するのは、常に論理的な矛盾を抱えている。たとえば、因果関係

を持つ２つの要素は、常に強い相関性を持っている。しかし、概念として使用される時、原因と結果は常に異なる概念として区分される。また、概念の構成要素の選択について、プロトタイプモデルを用いて判断すると、候補の属性は無限であり、そして属性を選ぶ基準も決して明確ではない。その点を説明するために、Murphy は「プラム」と「芝刈り機」の例を挙げた。一見関連性のあまり存在しない「プラム」と「芝刈り機」の間には無数の共通要素が存在する。たとえば、両者は共に「1,000 万年前には存在しなかったもの」や、「一定の空間を占用しているもの」というような無限の共通点が列挙できる。Rosch の提示した「要素のクラスター」という方法で分析すれば、両者の間の関連性は必ずしも椅子とテーブルの間の関連性より弱いわけではない。つまり、どの属性が概念の「要素のクラスター」に入れるか、どのような特性が排除されるか、その基準について Rosch の説明は十分ではない。

すなわち、プロトタイプ理論は「家族的類似」の概念構造を扱う一種の方法となり、一部の概念構造を分析する際に高い適用性を示した。ただし、プロトタイプ理論は簡単かつ明晰な概念分析の手法を提示した一方、Murphy に指摘された概念の一貫性、および構成要素の選択といったような操作上の問題を招いた。いじめの概念に適用するために、プロトタイプ理論に内在する諸問題を克服する方法が求められる。Murphy の提示した概念認知に及ぼす「知識の効果」（knowledge effects）はその試みの一つである。

Murphy によると、概念は我々の世界に関する一般的知識の一部であり、ほかの事物から孤立して学習することができない（Murphy 2004: 60）。言い換えれば、概念は一つ一つ独立の形で私たちに認識されるのでなく、常にほかの事物との関連の下で認識されている。そして、概念学習に対する知識の効果とは、現実の事物に関する既存の知識が概念学習に与えた影響である。ここで「知識」と呼ばれたのは、特定の対象概念に関わる知識だけではなく、世界全体に関わる既存の情報も含まれる。概念認知のプロセスにおいて、知識は概念の定義づけのみならず、新しい概念の学習ないし概念の分類、使用、推論に対しても影響を及ぼしている（Murphy 2004: 146-7）。概念構造の一貫性は、世界に関する知識を軸として実現したのである。概念の構成要素も、知識に依拠して選ばれたものである。たとえば、動物園で初めて見た動物の種類を判断する際に、私たちは通常、動物に関する知識の蓄積を運用し、動物の足の数や毛皮などの特徴に依拠して判断する。それ以外の動物園の位置や訪問の時間などの要素は、私たちの判断プロセスに参加する可能性が低い。それに対して、ある社会的出来事に関する概念を認知する時、発生の場所や時間は常に重要な要素と見なされる（Murphy 2004: 147）。

家族的類似の概念構造を理解する際に、要素の選択に及ぼした背景的知識の効果も経験

的研究によって検証された（Murphy and Lassaline 1996: 95-9）。家族的類似の概念では、構成要素が人々の背景的知識によって選択されたので、必ずしも共通の要素を持たず、特定のプロトタイプに類似するわけではない。そのため、概念の依存する知識システムに選択され、概念認知に参加した要素は必ずしも全てのメンバーに保有されず、しばしば家族的類似の構造を呈している（Murphy and Lassaline 1996: 95-9）。

Murphy の概念理論において重要な位置を占めた「知識」というものの形成について、彼本人は直接に説明しなかった。しかし、Murphy の初期の研究をさかのぼると、W. V. O. Quine の言語論の影響が見られる（Murphy and Medin 1985: 290）。Murphy は「知識の効果」モデルの原型を提示した際に、Quine の以下の論点を引用した。「個人の類似性に対する感覚または分類体系は個人の成熟と共に発展していく。……その発展に従い、即時性、主観性、動物性に基づいた類似性が次第に放棄され、科学的仮説や仮定、構造に基づいた客観的な類似性へ転換していく」（Quine 1977: 171）。そして、知識の構造は人間の過去の経験に基づいて形成されたものである。その過程において、概念は重要な役割を果たしている。Quine によれば、「外部の事物に関する話や、ものに関する概念は、ただ一種の概念装置（conceptual apparatus）に過ぎない。その概念装置は、私たちに、私たちの感覚受容器（sensory receptors）の過去の刺激に依拠し、将来の刺激を予測し、制御させるものである」（Quine 1981: 1）。つまり、概念は使用者の目的に応じて創造されたものである。概念を通じて、過去の経験、情報、知識が蓄積され、新しい事物を認知し、判断する際に、その蓄積された知識が一定の構造に従って活用される。Rosch によるプロトタイプや「要素のクラスター」と異なり、Quine と Murphy による知識および概念は人為的に加工されうる、使用者の目的に従って活用される能動的なものとなる。

2-4　小括

本節では、概念構造の家族的類似の形成原因に関する学説を整理した。概念は必ずしも形式論理学の主張したような構成要素の積集合ではなく、時には家族的類似の構造を呈し、要素並列型の定義で捉えられないこともある。そして、概念を構成する要素も単に自然的に形成された、人間が受動的に受け入れたものではなく、人間の既存の情報や知識に基づき、能動的に創造された側面もある。本節は、概念の構造、とりわけ「家族的類似」のような複雑な構造の形成過程を明らかにし、概念構造を扱うための基礎的な作業を完成した。

表 1 は形式論理学および Rosch、Murphy の概念理論の主張を整理したものである。とりわけ、概念の本質に対する理解、概念構造の形成、そして家族的類似の概念構造の形成に関する 3 種類の概念理論の主張に注目している。まず、言語と現実世界の関係について

は、Rosch と Murphy にとって、概念は現実世界を忠実に反映するものではなく、人間の認知モデルの影響を受け、現実世界と異なった論理を示している。しかし、言語の意味の形成について、Rosch は現実世界における属性のあり方から求め、意味を人間の認知モデルによって加工された、現実世界の属性による刺激に対する私たちの反応と認識した。そのため、事物の類似性の由来も自然的カテゴリーというプロトタイプメンバーとの類似にあるとされた。それに対して、Murphy は意味の形成を既存の知識に規定された事物の関連に関する諸形式、いわゆる対象に依存する知識的文脈から求める。そして、事物の類似性も対象の依存する知識システムによって規定されている。さらに、属性の共通性を主張した形式論理学にとって、「家族的類似」という概念構造の存在はその理論的な前提と論理的に矛盾するものであり、それに対して、Rosch と Murphy は「家族的類似」の形成に関して各自の解釈を提出した。Rosch によれば、家族的類似はプロトタイプメンバーと類似する形式の多様性によって形成されたものである。一方、「知識の効果」の理論によると、知識システムの提供した事物の多様な関連形式こそが家族的類似の形成の原因である。以上のそれぞれの研究伝統は、概念というものに対して互いに通約不可能な認識を持っている。それゆえに、概念構造を取り扱う際に、異なった方向から展開してきた。形式論理学とプロトタイプ理論の伝統に基づいた概念分析の方法に存在する問題点を指摘したうえで、知識の効果という研究伝統の知見を反映できる分析方法を探索していく。

表１　三種の学説の比較

	概念の本質	概念と事物の関係	概念構造の形成	家族的類似の存在	家族的類似の形成
形式論理学	実在物の写像	厳格な対応関係	実在物の構造の模写	否認	否認
プロトタイプの効果	人間の認知モデルの産物	事物は認知の対象だが、その間厳格な対応関係はない	外部世界にある諸属性の刺激に対する反応	承認	プロトタイプとの類似の多様性
知識の効果			人間の既存の知識システムの産物	承認	知識システムによる事物の関連形式の多様性

次節では、考察の焦点を概念の認識論的な次元から、社会科学における比較研究のための概念の扱い方、すなわち方法論的な次元に移ってゆく。概念を扱う方法は、概念の認識論と強く繋がっている。次節の内容をより理解しやすく説明するために、本節で区分し

た3種の概念認識論の学説に対照しながら、既存の概念分析の方法を考察する。最後に、Murphyの提示した概念理論に基づき、「知識の効果」の知見を実際の分析に応用するための方法を説明する。

3　比較研究における「家族的類似」の概念の分析方法

以上では、形式論理学、プロトタイプ理論、知識の効果という3種の学説、とりわけ概念認知と概念構造に対する解釈を整理した。本節より、その3種の学説に基づいて作成した社会科学の概念分析の方法を考察する。具体的には、形式論理学に基づいたSartoriの「抽象化の梯子」、およびプロトタイプ理論に基づいたCollierとGoertzによる修正を考察したうえで、以上の方法をいじめ概念の分析に適用する際に起りうる問題を提示する。さらに、MurphyとQuineの示唆を参考にしながら、「要素間の関連記号」という方法を提案し、Goertzが提示した分析方法を修正する。

3-1　Sartoriの「抽象化の梯子」とCollierによる修正

前節で述べたように、社会科学において形式論理学の概念理論はまだ数多くの擁護者を持っている。そのため、形式論理学の概念理論に基づいた概念分析の手法も、現在の比較研究において支配的な地位を占めている。その中で、Giovanni Sartoriが提示した「抽象化の梯子」（the ladder of abstraction）は、社会科学の比較研究において強い影響力を与えている。

「抽象化の梯子」という手法は、形式論理学の「内包」と「外延」の概念を使用した。形式論理学にとって、あらゆる概念は内包と外延をもつ。概念の内包とは、概念に反映されている対象の本質的表象の総体である。たとえば、「家」という概念の内包とは、家が家であるために必要な諸性質である。それに対して、概念の外延とは、概念に反映されている対象の範囲である。たとえば、「家」という概念の外延は、これまでに存在した、また現に存在する、そしてこれから建築されるすべての家によって構成される（仲本 2001: 21-2）。そして、概念の比較可能性も内包と外延によって決定される。つまり、比較不可能な概念とは、その内包と外延とにおいて、なんら共通のものがないほどにかけはなれた対象を反映している概念である。一方、比較可能な概念とは、その内包と外延とにおいて、なんらかの共通のものが存在するような概念である（仲本 2001: 29）。概念の内包と外延とは相互に関連し合い、反比例の法則を持っている。具体的には、内包が多いほど外延は小さくなり、外延が大きいほど内包は小さくなる（仲本 2001: 22）。

形式論理学の以上の規則に従い、Sartoriは「抽象化の梯子」という概念道具を比較研究の方法として提示した。彼によれば、概念の内包が大きいほど、その外延は小さくなると同時に、概念の抽象化の程度は低くなる。それに対して、概念の内包が小さいほど、その外延は大きくなると同時に、概念の抽象化の程度は高くなる（Sartori 1970）。たとえば、ハト、タカ、ツル、スズメなどの概念にとって、「トリ」という概念は4つの概念の共通属性を持つだけで、概念の内包が少ない。しかし、内包の縮小と同時に、概念の外延が広がっていき、抽象化の程度が高くなる。Sartoriはその変化を「梯子のぼり」にたとえた。つまり、「抽象化」という梯子の階段をのぼるほど、概念の抽象化の程度が高くなり、概念の外延が広がっていき、より多くの下位概念を含むようになる（Sartori 1970: 1040-6）。そのため、ハト、タカ、ツル、スズメといったような共通の属性を持つと同時に、それぞれ独自の属性も持つ対象を比較する際に、その共通属性を持つ抽象的な「トリ」という概念は適切な分析道具である。

しかし、家族的類似の構造を示す概念に適用する場合には、「抽象化の梯子」は論理的矛盾に直面する。David Collierの指摘したように、家族的類似の構造を持つ概念、とりわけ「放射状カテゴリー」の概念構造にとって、「抽象化の梯子」をのぼるほど、概念の内包は狭くならず、むしろ拡大していくようになる。たとえば、「生物学上の母親」という抽象度の低い下位概念より、上位概念である「母親」のほうがより多くの内包を持ち、抽象化の程度が高い（Collier and Mahon 1993: 849-51）。言い換えれば、放射状カテゴリー構造にとって、内包と外延の関係は形式論理学に想定された反比例の関係ではなく、むしろ正比例の関係である。それゆえに、放射状カテゴリーの概念構造を取り扱う際に、CollierはSartoriの「抽象化の梯子」を修正しようと主張し、内包のより広い「放射元」であるプロトタイプを比較の基準として使用することを提案した。

3-2　放射状カテゴリーではない場合とGoertzの提案

Collierによる改造は、一定の程度でSartoriの提示した「抽象化の梯子」の適用可能性を向上させた。ただし、Collierの方案をいじめ概念に適用すると、以下の問題点が生じる。第一に、一つの社会の内部では、いじめのプロトタイプと見なされる典型例はないわけではない。たとえば、いじめ現象が社会問題化になる際に、その契機となった事件の特徴は、常にいじめの典型例として見なされる。しかし、国際比較の際に、各社会のいじめ概念の原型となる代表例は存在しない。いじめの国際比較研究が展開される前に、いじめや「校園暴力」（中国における「いじめ」の対応用語）、mobbing（スウェーデンにおける「いじめ」の対応用語）と呼ばれる現象は、既に各社会において、その社会の独自の関心に従って社

会問題化し、独自の研究伝統によって取り扱われていた。海外の研究成果あるいは対策プログラムを導入し、自国に応用する例は存在する（たとえばイギリス、台湾）が、スカンジナビア、日本、アメリカのような、もともとローカルな定義を作成した社会の方が多い。第二に、語源というプロトタイプを考えると、bully という英語はゲルマン語族に由来したので、ロマンス語族の語源を持たない（Smith 2014: 25）。そのため、日本、中国などのアジア諸国だけではなく、フランス、イタリア、スペインなどのロマンス語族のヨーロッパ諸国においても、直接に対応する用語は存在しない。共通の語源というプロトタイプがないため、欧米諸国においても bully 概念の定義をめぐる論争が存在する。

いじめ概念は家族的類似の構造を示したが、各社会に使用される概念は共通の語源または共通の典型例といったような「プロトタイプ」になりうるものを持たない。すなわち、国際比較におけるいじめという概念は、家族的類似の構造を持っているにもかかわらず、「放射状カテゴリー」の構造ではないため、Rosch のプロトタイプ理論に従って理解するのは適切ではなく、Collier による提案の適用範囲の外にある。そのため、いじめ概念と同じような「『非』放射状カテゴリー」の家族的類似の概念構造にとっては、適用可能性のより高い比較方法が必要であろう。

Gary Goertz は家族的類似の構造を示した概念に適用できるより汎用性の高い方法を提案した（Goertz 2006: 44）。簡単にいえば、Goertz は概念を構成する様々な要素を「代替可能性」（substitutability）の高さに準じ、概念の構成要素を代替できない「必要条件」と代替できる「十分条件」に分けた。ここでの「代替可能性」とは、概念を構成する要素と同等な効用を持っている要素があるかどうか、ということを指す。たとえば、「暴力」という概念を構成する要素の中で、身体的暴力と言語の暴力は常に「同等な効用」を持つ要素とみなされ、互いに代替できるものと認められている。それに基づいて、Goertz は形式論理学の概念構造と家族的類似の概念構造を一つの連続体（continuum）においた。「必要条件」のみに構成された概念は一つの極であり、「十分条件」のみに構成された概念はもう一つの極である。論理的に表現すれば、前者が「A かつ B かつ C」の構造であり、後者が「A あるいは B あるいは C」の構造である。もちろん、中間状態となる「A かつ B あるいは C」の構造も存在する。つまり、概念の構造をはっきり分析すれば、すべての概念は以上の集合の形式で表現できる。そして、家族的類似の構造を呈した概念を比較研究で使用する際に、プロトタイプという上位概念の存在する必要がなくなり、構成要素の集合だけで十分である。

Goertz の提案は概念構造の明確化によって、概念の抽象化程度の変化を避けて、概念自身のレベルで比較研究に関する問題を解決した。Goertz の提案に従えば、各社会のいじ

め現象を比較するとき、「暴力」あるいは「非行」などの上位概念を用いなくても支障はなく、それぞれの「いじめ」概念の構成要素の集合を使用すれば十分である。ただし、前節で述べたように、概念を構成した属性や要素は互いに独立して機能するのではなく、むしろ知識の構造に従って認知され、使用されている。そのため、概念の依存する知識システムを無視し、構成要素の関係を「かつ」と「あるいは」に還元すれば、間違った判断をする可能性がある。以下では、いじめ概念の例を挙げながら説明する。

スカンジナビアでは、mob という概念が bully の対応用語となる。スウェーデン研究者 Olweus による mob の定義は、イギリス研究者 Smith による bully の定義と共に「行為の反復性」を強調している。北欧社会の日常用語において、mob は「複数の個人は、同じ動機に従い、一時的に集団を結成し、同じような行動をとる」という行為を指している（Olweus 1978: 2）。学校における mob 現象を研究する際に、Olweus は主に被害者に対する保護に注目した。Olweus によれば、「突発的な行為と比べ長期にわたって反復されたいじめ行為のほうが、深刻な被害を招くリスクが高い」ので、学校におけるいじめ現象の被害者を保護するために、日常生活における mob の意味を部分的に修正し、深刻な被害を招いたリスク要因である「継続性・長期性」を定義において強調する必要がある（Olweus 1978: 4-6）。

それに対して、Smith による bully の定義は、「ある児童は、ほかの個人または集団の児童に中傷、殴打、威嚇、監禁、仲間はずれ、軽蔑を受ける、かつその行為は反復的に発生し、被害者はその行為に抵抗できない場合、その児童はいじめられていると言える。また、児童が繰り返し卑劣なからかいを受ける時も、その児童はいじめられていると言える。ただし、両者の力の強さが同じ際には、いじめと呼ばない」というものである（Whitney and Smith 1993: 7）。Olweus と異なり、Smith による定義が行為の「反復性」を強調する理由は、深刻な被害を招くリスクという被害者保護ではなく、むしろ加害者の加害動機の強調である。bully を一種のパワーの乱用と認識した Smith は、彼の提唱した bullying 防止策、すなわち「シェフィールド・プロジェクト」において、加害者側からの人権侵害、とりわけ人種間の差別の禁止を強調している（Department of Education 1994）。つまり、人権侵害というような行為を繰り返して実施するほど、加害者の悪質な動機が強くなると認識される（Smith 2014: 17）。

以上の例から見れば、いじめという概念を分析する際に構成要素を孤立したものとして理解すれば、家族的類似の概念構造の成因、そして概念構造の本来のあり方に対する誤った判断が得られる可能性がある。それゆえに、Goertz の提案をそのままにいじめ研究に適用するのは十分ではなく、以上の問題点を解決できる道具が要請される。

3-3　要素間の関係シンボル

形式論理学の概念理論に基づいて提案されたSartoriの「抽象化の梯子」という方法、およびRoschのプロトタイプ理論に依って提示されたCollierの改造は、依然として多数の概念に適用できる方法となっている。現在に至るまで、形式論理学またはプロトタイプによって概念の構造を理解するのは、依然として簡単かつ有効な手法と考えられる。しかし、いじめ概念は「年齢」や「身長」のような明確な基準のある概念ではなく、形式論理学の概念理論の適用範囲の外にある。また、国際比較におけるいじめ概念は共通の語源または共通の典型例を持たないため、プロトタイプ理論も適用できない。それゆえに、いじめ概念は特定の知識システムに依存すると想定し、MurphyとQuineの概念理論に従って理解する試みが必要だと考える。

本稿は以上の問題の解決策として「要素間の関係シンボル」という分析道具を提案する。ここで「関係シンボル」（relationship symbol）と呼ばれるのは、Goertz（2006: 53）が概念構造を表記するための用語である。Goetrzに使用された「関係シンボル」は、単に上位概念と下位概念の間の関係、たとえば「学業成績」と「数学の成績」、または「IQ」と「言語能力」の関係を表記するものとなる。本稿はGoetrzが提案した「関係シンボル」の内容と使用範囲を広げ、概念の構成要素の関係を表記するために使用する。「要素間の関係シンボル」に対する説明の前に、形式論理学とプロトタイプ効果の問題点を再び確認する。図1で示すように、形式論理学とプロトタイプ効果という2つのモデルを使用する場合には、上位概念としての「イジメ」という概念は存在しない。しかし、前述のとおり、現実には各社会のいじめ概念の間では共通する要素はなく、そしてプロトタイプとして挙げられる概念も見つからない。その2つのモデルはいじめの国際比較研究において使用すると、適用可能性の問題が生じる。

形式論理学のモデル

	概念	内包				
上位概念	イジメ	A	B			
下位概念	Bully	A	B	C		
	Mob	A	B	C	D	
	欺凌	A	B		D	
	覇凌	A	B		D	E

プロトタイプ理論のモデル

	概念	内包				
上位概念	イジメ	A	B	C	D	E
下位概念	Bully	A	B			
	Mob		B	C		
	欺凌			C	D	
	覇凌				D	E

ＡＢＣＤＥ：定義を構成する属性要素

図1　形式論理学とプロトタイプ理論によるいじめ概念の図式（架空内容）

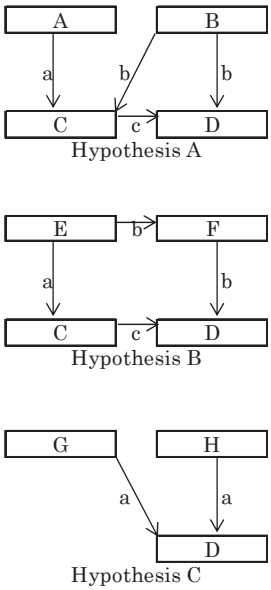
Goertzの提案によれば、上位概念である「いじめ」はなくても、いじめの操作的定義として理解し、国際比較で使用することもできる。図を通じて示すと、図1の右側の図式で書かれた「A、B、C、D、E」という「いじめ」の要素集合が分析道具として使用できる。しかし、前節で指摘したように、bullyの定義にある要素「B」とmobの定義にある要素「B」は必ずしも同じ文脈に属しない。そのため、「AB」と「BC」の組み合わせは異なる意味を持っている。それゆえに、要素の間に「かつ」または「あるいは」というロジックの記号だけではなく、知識の関連、とりわけ仮説立て、推論などに関わる記号を入れる必要がある。たとえば、Olweusによるmobの定義とSmithによるbullyの定義において、「行為の繰り返し」という要素はそれぞれ「被害者の苦痛」と「加害者の動機」を指している。具体的には、Olweusによるmobの定義において、「行為の繰り返し」と「被害者の苦痛」の関係は「強化の効果」であり、単純な並列の関係ではない。それに対して、Smithによるbullyの定義において、「行為の繰り返し」と「加害者の動機」の関係は「悪意の証し」となる。

つまり、今までの比較研究において使用されたいじめの操作的定義は、全て形式論理学の概念構造に従って作られたものなので、構成要素の間の関係は「かつ」の関係と予想されている。Goertzは概念の家族的類似の構造に配慮し、構成要素の繋がり方を単純な「かつ」だけでなく、「あるいは」という関係も設定したが、その方案は依然として概念の構造を反映しきれない。Murphyの概念認知論とGoertzの提示した概念分析の方法を組み合わせるために、ロジックの繋がり方のみならず、知識の構造を表示できる記号も必要となる。たとえば、OlweusとSmithによる定義において、「行為の繰り返し」という要素がほかの要素と関連している。そして、その関連性は単純に「かつ」または「あるいは」で捉えきれないのである。図2の示すように、要素間の因果関係と強化効果を区分し、関係シンボルとして挿入することにより、定義の理解がより明確になる。それに対して、知識的関係シンボルのない場合には、下位概念の間の類似性に対する過大評価が起きてしまう。

人間の知識の構造は「かつ」と「あるいは」というシンプルな記号によって反映できるものではないため、より複雑な記号で表現しなければならない。とりわけ、いじめのような極めてあいまいで多義的な概念を理解するためには、情報を表示する構成要素の記号だけではなく、情報の繋がり方を表示する要素関係の記号も必要となる。2種類の要素は異なる体系に属するため、図2において、構成要素を大文字で、要素関係を小文字で表記した。言うまでもなく、概念の構成要素の間で、「かつ」および「あるいは」というロジックの関係も存在するため、「関係シンボル」は決して「因果関係」や「強化効果」のみに限らない。例えば、前述のSmithによるbullyの定義において、「中傷、殴打、威嚇、監禁、

仲間はずれ、軽蔑を受ける」といったような行為は、bully というカテゴリーの具体例として提示される。その場合には、中傷や殴打などの構成要素の間は「あるいは」の関係シンボルで繋げられるが、それと「加害行為」の間の関係シンボルは「因果関係」や「強化効果」ではなく、むしろ「表象」の関係である。そうすると、知識システムによる事物の関連形式の多様性が概念分析において扱えない問題がある程度は解消できるだろう。

また、「家族的類似」の概念構造を理解する際に、それぞれの社会に使用されるいじめ概念の類似性の由来を理解するルートも増えてきた。具体的に言えば、伝統的な形式論理学の主張した「共通の属性」とプロトタイプ理論の提示した「共通のプロトタイプ」のみならず、共通の知識の繋がり方というルートも「関係シンボル」を通じて捉えられるようになった。記号で表現すれば、「AaX」や「YbD」といったような仮説の形式の関連も類似性の成因として理解できるようになる。大文字の構成要素だけではなく、因果関係、強化効果、本質の表象といったような小文字の関連記号は、ほとんどどの社会でも使用される共通のものであり、異なる文化あるいは言語の間で通約できない状況の発生する可能性はほとんどない。いじめという行為も、すべての国の日常生活において常に見られる行為であり、特定の文化に限らない。つまり、関係シンボルの導入は、示される情報量を増やし、概念構造をより正確に反映させたと同時に、概念分析の方法の汎用性を保障した。



A：道徳の欠如
B：学級秩序の崩壊
C：加害者の加害動機
D：被害者の苦痛
a：因果関係
b：強化効果
c：実行

C：加害者の加害動機
D：被害者の苦痛
E：人権差別の思想
F：自己否定的人格
a：因果関係
b：強化効果
c：実行

D：被害者の苦痛
G：学級の異質排除志向
H：被害者の異質の特徴
a：因果関係

	Ha			Hb			Hc	
Bully	AaC		CcD			FbD		
Mob	AaC	BbD	CcD					
いじめ(86')			CcD	EaC		FbD		
いじめ(04')			CcD	EaC	EbF	FbD		
校園暴力			CcD	EaC				
校園覇凌							GaD	HaD
…				…				

図２　知識的関係シンボルの作用

4　むすび

本稿は、いじめの国際比較研究の方法論的基礎を築く予備的な研究である。概念構造に関する3つの学説に対する考察により、「家族的類似」の概念構造の形成に関する2種の理解、すなわち、共通のプロトタイプによる要素の類似性、および共通の知識システムによる認知の類似性とまとめた。そのうえで、以上の学説に基づいて提示された社会科学の概念分析の方法を分析し、いじめ概念に適用する際に起こりうる問題を提示した。とりわけ、プロトタイプ理論に基づいて、放射状カテゴリーという家族的類似の概念構造に適用できるCollierの提案の適用可能性の限界を見出した。さらに、MurphyとQuineの提示した概念形成に対する知識の効果という学説と、家族的類似の構造を示す概念を分析するためのGeortzの解決策を結合させるために、「要素間の関係シンボル」という分析道具を提示した。つまり、概念の構造を分析する際に、「構成要素」と「関係シンボル」の両方に注目し、概念構造が受けた知識の構造による影響も分析の対象とする。要素の類似性および知識の構造による類似性は同時に分析の対象として取り上げるために、Goertzの提示した方法を修正するための方策およびその理論的基礎を提示した。

本稿は概念構造に関する論理学、認知学の成果を社会科学の概念分析と結合させ、いじめ概念の示した複雑な概念構造を扱える分析戦略を提示した。それを使用すれば、もともと断念しなければならない研究が可能になり、そもそも方法論の不十分という問題を持つ比較研究の妥当性も高められた。とりわけ、第3節で提示した概念の分析方法は、従来の形式論理学だけでなく、プロトタイプ効果に由来の家族的類似の構造と、知識の効果より由来の家族的類似の構造にも適用できるため、現在の分析方法より高い汎用性が期待され、社会科学における比較研究の可能性を広めた。もちろん、予備的研究である本稿は、家族的類似の概念を比較研究で捉える可能性を示した論理学的な基礎、そして分析の方法論的な基礎を検討したが、まだたくさんの課題が残っている。将来様々な経験的な研究を通じ、多くの仮説を作成して検証することにより、以上の分析方法を精緻化する工夫が求められるだろう。

謝辞

本研究はJSPS科研費16J10962の助成を受けたものです。

参考文献

アリストテレス, 中畑正志・早瀬篤・近藤智彦・高橋英海訳, 2013,『カテゴリー論・命題論 アリストテレス全集 1』岩波書店.

Collier, David and James E. Mahon, 1993, "Conceptual 'Stretching' Revisited: Adapting Categories in Comparative Analysis," *The American Political Science Review*, 87 (4): 845-55.

Department of Education, 1994, *Bullying: Don't Suffer in Silence: an Anti-Bullying Pack for Schools*, Homepage of the UK government's official archive.（Retrieved December 8, 2016, http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20040722012353/ http:/dfes.gov.uk/bullying/pack/02.pdf）.

Gini, Guanluca and Tiziana Pozzoli, 2009, "Association between Bullying and Psychosomatic Problems: A Meta-analysis," *Pediatrics*, 123 (3): 1059-65.

Goertz, Gary, 2006, *Social Science Concepts: A User's Guide*, Princeton University Press.

Hobbes, Thomas, 1651, *Leviathan*,（= 2014, 角田安正訳,『リヴァイアサン Ⅰ』光文社.）

Lakoff, George, 1987, *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*, Chicago: University of Chicago Press.（= 1993, 池上嘉彦・河上誓作他訳,『認知意味論――言語から見た人間の心』紀伊國屋書店.）

森田洋司, 2010,『いじめとは何か――教室の問題、社会の問題』中央公論新社.

Murphy, Gregory, 2004, *The Big Book of Concepts*, London: Massachusetts Institute of Technology.

Murphy, Gregory and D. L. Medin, 1985, "The Role of Theories in Conceptual Coherence," *Psychological Review*, 92 (3): 289-316.

Murphy, Gregory and Mary E. Lassaline, 1996, "Induction and Category Coherence," *Psychonomic Bulletin and Review*, 3 (1): 95-9.

仲本章夫, 2001,『論理学入門』創風社.

Olweus, Dan, 1978, *Aggression in the Schools: Bullies and Whipping Boys*, Washington D.C.: Hemisphere Press.

Quine, W. V., 1977, "Natural kinds", S. P. Schwartz ed., *Naming, Necessity and Natural Kinds*, New York: Cornell University Press.

――――, 1981, *Theories and Things*, Cambridge: Harvard University Press.

Rosch, Eleanor, 1973, "On the Internal Structure of Perceptual and Sematic Categories," T. E. Moore ed., *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, New York: Academic Press.

Rosch, Eleanor, Carolyn B. Mervis, Wayne D. Gray, David M. Johnson and Penny Boyes-Braem, 1976, "Basic Objects in Natural Categories," *Cognitive Psychology*, 8 (3): 382-439.

Sartori, Giovanni, 1970, "Concept Misformation in Comparative Politics," *American Political Science Review*, 64 (4): 1033-53.

Sentenac, Mariane, Aoife Gavin, Catherine Arnaud, Michal Molcho, Emmanuelle Godeau and Saoirse Gabhainn, 2011, "Victims of Bullying among Students with a Disability or Chronic Illness and Their Peers: a Cross-National Study Between Ireland and France," *The Journal of Adolescent Health*, 48 (5): 461-6.

Smith, Peter K., 2014, *Understanding School Bullying: Its Nature and Prevention Strategies*, London: Sage.

Srabstein, Jorge and Thomas Piazza, 2008, "Public Health, Safety and Educational Risks Associated with Bullying Behaviors in American Adolescents," *International Journal of Adolescent Medicine and Health*, 20 (2): 223-33.

Whitney, Irene and Peter K. Smith, 1993, "A Survey of the Nature and Extent of Bullying in Junior Middle and Secondary Schools," *Educational Research*, 35 (1): 3-25.

Wittgenstein, Ludwig, 2003, *Philosophische Untersuchungen*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main.（= 2013, 丘沢静也訳,『哲学探究』岩波書店.）

姚逸葦, 2015,「試論『校園欺凌』的国際比較中存在的方法論難題及其解決策略」（いじめの国際比較研究方法論的問題およびその解決策に関する探究）, 銭民輝,『社会学視野下的教育和現代性』（社会学における教育と現代性）人民日報出版社.

（やお　いうえ・博士後期課程）